

「青」とドイツ語の色彩語blauの色相差について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000428

「青」とドイツ語の色彩語 blau の色相差について¹⁾

城 岡 啓 二

shirooka@nifty.com

0 はじめに

「青」と blau が対応語であることは間違いない。しかし、基本的に同じ範囲の色相に使われる色彩語なのかどうか、これまで検討できるような資料が得にくかったということもあると思うが、十分に研究、記述されてきたとはいえない。

「青」と blau は、あらわしている色相の点でもかなり明確な違いがあるし、青の次の色相の紫色をあらわす色彩語がドイツ語ではあまり発達していないという点での消極的な違いもあると思われる。本稿では、近年誰でも利用できるようになった文学作品や新聞などの電子テキスト²⁾も利用しながら、「青」と blau の違いをできるだけ実証的に述べたいと思う。

I 青と blau の色相の違い

緑から青を経て紫にかけての色相の連続を考えて blau の色相がどのあたりにあるか考えるなら、緑との境界領域は「青」と blau の違いははっきりしない。青緑の色相が日本語やドイツ語で「青」なのか、「緑」なのか、青緑の色相には古くはソニドリと言われたカワセミ (Alcedo atthis, Eisvogel, 日本のカワセミも同一種) の羽の色などがあるが、日独の差異を判断するのは難しい。ミドリの語源という説³⁾もあるソニドリであるが、カワセミの羽の色は現代日本の図鑑やガイドブックではコバルトブルーや青や瑠璃色になっていて、緑色という記述は見当たらない。一方、ドイツ語ではカワセミの羽の色⁴⁾をしらべてみると、blau, grünblau, türkisblau, türkis, blaugrün とかなりゆれがあるが、grün との複合色彩語や青緑の色名 türkis が出てくるところを見ると、現代語に限れば、ドイツ語の方がむしろカワセミの羽の色を緑がかった色と見ていると言える。しかし、現代語の「青」(緑を含めない、狭義の「青」) が青緑までも「青」の

範囲としているとも単純に言えない。ブルーチーズ (Blauschimmelkäse) の場合は、日本語ではどちらかと言えば緑色と考えられているアオカビ⁵⁾がドイツ語や英語で「青」と考えられていることになるから⁶⁾、今度はドイツ語の blau のほうが青緑まで伸びているということになってしまう。

一方、青から紫にかけての色相を考えると、「青」と blau の違いは明白である。日本で紫色と考えられている動植物や物がドイツで blau となる場合がかなりある。リトマスゴケから得られるリトマス色素 (Lackmus) の色が日本の百科事典などでは「紫色」とされ、ドイツ語の辞典などでは blau とされているし、日本でウラムラサキと呼ばれている同じキノコ (Laccaria amethystina⁷⁾) がドイツで Blauer Lackpilz⁸⁾となっていたり、バルト海の紫色のクラゲが Blaue Nesselqualle (Cyanea lamarckii) となっていたりする。花の色では、日本では一般に青い花は少ないと考えられているようだが、日独の園芸書や辞書に出てくる花の色を調査してみると、青い花は日本では少ないが、ドイツではめずらしくない。また、日本で紫色とされる同じ花がドイツでは青い花になる場合があることが分かっている。フジ (Blauregen, Wisteria floribunda) やアルファルファ (Blaue Luzerne, ムラサキウマゴヤシ, Medicago sativa) では名前の付け方に両言語の違いが出ているし、日本では紫色の花を咲かせるスミレ⁹⁾がドイツでは veilchenblau という blau の複合色彩語があるだけでなく、花の色を事典などで記述する場合も blau から violett とされることにも「青」と blau のあらかず色相の差は明確だろう (城岡 2000, 251-252)。なお、植物の世界ではすでに同一個体の園芸植物が世界中で栽培される場合があって、色彩記述の言語差をしらべるのに好都合である。日本で作出されたクレマチスの「Haku Ookan (白王冠)」という個体についてカタログや園芸書の色彩の記述の違いをまとめておこう。日本で紫色とされる花がやはり tintenblau や blau や violettblau になっている。

- (a) 濃い紫色 (『クレマチス』日本放送出版協会 1985) (b) 濃い紫色 (『クレマチス』日本クレマチス協会 六耀社 2000) (c) 濃赤紫色¹⁰⁾ (『クレマチスのすべて』婦人生活社 2001)
(d) 濃紫色 (『クレマチスとつる性の植物』主婦の友社 2001) (d) tintenblau (Clematis Sorten- und Preisliste. F. M. Westphal, gültig ab 1999 / 2000) (e) blau, violettblau (Clematis. Andreas Bärtel, Ulmer, 1999)

花の色だけでなく、身近な果物のブドウの色についても日独で色彩記述はこうなっている。清少納言は「葡萄染の織物。すべて紫なるは、なにもなにもめ

でたくこそあれ、花も、糸も、紙も。」(『枕草子』83段)と書いている。当時ブドウ¹¹⁾の実の色をすでに紫色と考えていたことが分かるが、ブドウの色を紫色だと感じる感覚は現代でも変わらない。日本色彩研究所の1965年の連想語の調査では「ブドウ」が出てきているのは、赤、黄、緑、青、紫、白、黒の7色相で紫だけである(『色彩の事典』1987, 261, 色紙を提示しての自由連想)。また、現代のブドウの各品種を正確に記述しようとした場合、どのような色彩語が使われるか、『NHK 趣味の園芸 よく分かる栽培 12 か月 ブドウ』(2000)の品種一覧(42品種)で調べてみた。

1位：紫黒，黄緑	各11品種	3位：鮮紅	7品種
4位：紫赤	4品種	5位：白黄，紫紅	各3品種
7位：赤，黒紫，黄白	各1品種		

単純に「紫」とされた品種こそないが、「紫黒」が42品種中11品種あり、「紫赤」が4品種、「紫紅」が3品種、「黒紫」が1品種であり、現在の様々な品種についてもブドウの色は少なくとも紫がかっていると感じられていることが分かる。¹²⁾ドイツでは、ブドウの色について violett や lila が使われている例を今のところわたしは見つけていない。

1. Als Nachtschisch gab es (grüne, **blaue**) Weintrauben. (de Gruyter Wörterbuch Deutsch als Fremdsprache. 2000.)
2. Die Früchte des Weinstocks, die grünen und **blauen** Weintrauben, werden als Obst verkauft oder zu Wein verarbeitet. Aus grünen Trauben entsteht Weißwein, aus **blauen** Trauben Rotwein. (Kinderlexikon von A bis Z. 3. Aufl. München, 1994)
3. Weintraube: eine kleine weiße oder **blaue** Frucht (Pons Junior Illustriertes Wörterbuch. 1994)
4. Die Früchte (Weinreben) sind je nach Sorte **blau**, rot, grün oder gelb (Schülerduden: Die Pflanzen. 1988. 以下 SDP と略す)

ドイツ語では(1)のように grün と blau が使われるのが普通である。¹³⁾(2)では、「緑」と「青」にブドウを分類している他、赤ワインが「青ブドウ」で作られることが書いてあって、興味深い。(3)ではブドウはやはり「青い果実」とされている。また、緑の果実ではなく、白い果実としている点が白ワインの命名とも通じ、注目される。(4)の記述は植物事典であるためやや詳しく、ブ

ドウの色は「青」「赤」「緑」「黄色」と細かく分類されているが、それにもかかわらず、lila や violett など紫色の色相の色彩語は出てきていない。

ドイツ語の「青いブドウ」であるが、ブドウはドイツでは古くからの重要な栽培植物であり、昔の色彩分類が残っているという考え方もあるかもしれない。しかし、同じような色の Mahonien でも日独でやはり同じような違いが出ることから判断すると、この説は説得力がない。Mahonien は日独ともに庭木として栽培される灌木である。ただし、ドイツでは同属の数種類の Mahonien が栽培されているようであるが。日本では Mahonien の一種ヒイラギナンテン (*Mahonia japonica*) がもっぱら栽培されているという違いはある。この属の植物は基本的に黄色い花をつけ、実の色も種による目だった違いはないようだ。その実の色だが、ドイツでは blau や blauschwarz が使われている (5. ~ 8.)。一方、ヒイラギナンテンの実の色は日本ではやはり紫系統の色彩語が使われ、「黒紫色」や「紫黒色」や「紫」などと記述されている ((a) ~ (e))。

5. Die blauschwarzen Mahonienbeeren sind genießbar. (Mein schöner Garten. 1 / 2000)

6. Die Früchte sind meist blau. (SDP, Mahonien)

7. mit gelben Blüten und blauen Beeren (Der Brockhaus multimedial 2001, Mahonien)

8. Pflanze mit dornig gezähnten Blättern, gelben Blüten u. meist blauen, runden Früchten
(Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 10 Bände auf CD-ROM, 2000, Mahonien)

(a) 「熟すと白い粉をかぶった黒紫色になる」(『庭木・街路樹』金田洋一郎 山と溪谷社 1999)

(b) 「熟すと紫黒色になる」(『学生版 牧野日本植物図鑑』北隆館 1967) (c) 「実は9~10月

に黒紫色に熟す」(『樹木』片桐啓子 西東社 1998) (d) 「果実は黒紫色で白粉をかぶる」「果

実は紫黒色で白い粉をまぶしたようになる」(『花木・庭木』西田尚道 学研 2000) (e) 「果

実は6~7月に紫色に熟して柔らかくなります」(『新・園芸クリニック 4 庭木・花木・家庭果樹』NHK 出版 1997)

次に、青から紫にかけての煙 (Rauch) や靄 (Dunst) の色¹⁴⁾について見ておこう。一般に煙が青から紫に見えるのは煙自体の色ではなく、煙の微粒子が短波長の光、つまり青から青紫のあたりの光を反射し、他の波長の光を通過させるという、地域や言語による差のない自然現象である。煙の背景が暗闇だったり、黒っぽい場合に他の波長の光は吸収されてしまい、煙の微粒子によって反射される短波長の光の色が見える仕組みである。『新明解国語辞典』(第五版 三

省堂 1999) で「煙」を調べると「物が焼ける時立ちのぼる灰（白・紫・黒）色などの気体」とあり、青は出ていないが紫色が出ている。『新潮文庫の 100 冊』に出てくる青と紫の煙を表記形ごとの頻度数でしらべてみると、「青い煙」(13), 「紫煙」(7), 「紫の煙」(7), 「紫色の煙」(4), 「青いけむり」(2), 「薄青い煙」(1), 「紫の烟」(1), 「紫のけむり」(1) となる。全体で青が 16 回に対して紫が 20 回だから、紫色の煙の方がやや多いとはいえ青い煙もかなり使われている。タバコの煙の場合は、日本では「紫煙」¹⁵⁾ と言い、「青煙」という複合語はない。ただし、日本人作家でも紫でなく、青を使い「青い煙」のように使う松本清張や芥川龍之介のようなひともいる。日本語では青か紫になる煙であるが、ドイツ語では blau にしかないようだ。Rauch や Dunst に色彩語の付いている例を新聞や文学作品の電子テキストでしらべてみると、violett や lila が使われている例は見つからず、タバコの煙も家の煙突から立ちのぼる煙も車の排気ガスもすべて blau になっている。

9. **Blauer Rauch** steigt abends aus den weit auseinanderliegenden Rundhütten auf: Kochzeit. (DIE ZEIT vom 12.01.1996)
10. Äste von geschnittenen Bäumen werden angezündet, Feuer und Rauch. **Blauer Rauch**, es gibt ihn wirklich. (TAZ vom 09.02.1991)
11. [...], **blauer Rauch** stieg von den offenen Herdstellen und waberte durch die Kronen der Brotfruchtbäume, [...] (TAZ vom 30.06.1990)
12. Über Kopfschmerzen und Übelkeit, so der Sprecher, hätten am Wochenende viele Passanten geklagt. Ursache sind die Öldämpfe (Kohlenwasserstoffe), die als **blauer Rauch** dem Trabi-Auspuff entsteigen. (TAZ-BERLIN vom 14.11.1989)
13. Durch die allgemeine dicke, weißgraue Luft sahen wir mein Haus, und ein gerader **bläulicher Rauch** stieg aus demselben empor, [...] (Stifter: Studien)
14. **Die AnhängerInnen des blauen Dunstes** sollten höhere Krankenkassen- beiträge zahlen, wenigstens sollte die Tabaksteuer um ein Vielfaches erhöht werden. (TAZ vom 27.02.1991)
15. Die Regierung will die Werbung für den **blauen Dunst** generell verbieten. (TAZ vom 07.06.1990)

花の色や煙で確認した「青」と blau の違いは紫色の色相の関係する現象であればどこでも生じるはずだが、人体の変色の記述にもやはり当てはまる。日本

語では、青痣／*紫痣，*青斑／紫斑，青筋／*紫筋のように複合語では青が使える場合と紫が使える場合が決められているようだが，青筋というから静脈や血管の色なら青でなければならないというわけではなく，文学作品から用例を探してみると，「うすい紫の血管」（谷崎潤一郎：『痴人の愛』）「乳房を走っている堇色の静脈」（安部公房：『砂の女』）のような例がある。同じように紫痣という言い方はないが痣を紫色で記述することはある。「薄紫色に色褪せ見えかかっている痣」，「輪の形をした青紫色の痣」（吉行淳之介：『砂の上の植物群』），「痛々しく、赤紫色に変色した痣」（北杜夫：『榆家の人びと』），要するに，日本語では，決まりがあつたり，使い分けがあつたりするにせよ，これら青から紫の色相の人体の変色に「青」も使えれば「紫」も使えるわけだ。ドイツ語では，基本的に，打撲による内出血であれ，霜焼けであれ，寒いときの唇の色であれ，人体の変色部分について青から紫の色相の色彩語を使う場合は blau が使われることになると思われるが，場合によっては紫色の色相をあらわす色彩語が使われることも皆無ではないようだ。

16. Ullis Gesicht und Hände sahen vom Frost **blaurot** aus. (Erich Kästner: Das fliegende Klassenzimmer)
17. Die Gäste des Café Viktoria kommen in der Gewißheit, daß sich niemand wundert über **lila** Flecken im Gesicht. (TAZ Nr. vom 01.12.1995, エイズ患者の紫斑)

これまでに述べたことをまとめると，人体の変色については一部例外もあるようだが，blau は「青」よりも紫色の色相まで指示する傾向をもち，青から紫の色相の色彩語が必要な場合の選択肢が blau に偏っているということになる。このことはドイツ語に紫色の色相を専用にあらわす色彩語がまだ発達していないことと関係があるだろう。lila / violett は比較的新しい外来語であり，意味が不安定であり，最近では lila のほうが使われるようになっているが¹⁶⁾，それでも使用頻度は低い。¹⁷⁾ ドイツ語の色彩語の体系は violett や lila の存在を前提にしていけないとも言える。日常頻繁に使われる色彩語ではないが，blaurot や rotblau という隣り合う色名を組み合わせた複合色彩語がドイツ語にはある。この命名法から考えても blau と rot のあいだには他の基本的な色名はない（なかった）ということになるだろう。¹⁸⁾ 実際，日本語で赤キャベツあるいは紫キャベツと言われるキャベツが地域によって Blaukraut が使われたり，Rotkohl になったりするが，紫色の基本的な色彩語がなかったからこそ rot か blau かの選択になっ

ているのだろう。

ドイツ語との比較では、日本語では基本色の青が紫色に対して優勢とは言えず、花の色などでは青と紫の中間領域の色相であっても紫色が使われているように思われる。桔梗などはかなり青寄りの色である。国蝶になっているオオムラサキも写真で見るかぎりそれほど紫らしい紫色の蝶ではない。おそらく、日本語では「紫」を尊ぶ文化的伝統があったこともあって、「青」と「紫」の中間的な色相の場合でもともすれば「紫色」にする傾向があるということではないだろうか。

II 波長から見た「青」と blau

I では新聞や文学作品や専門書の記載内容などの言語資料を手がかりに「青」と blau の色相の違いについて述べた。光の波長についての色彩学の分野の記述も色彩語「青」と blau のあらわす色相の違いを示していると思われるのでここで扱うことにしたい。百科事典や色彩についての専門の文献に「青」や blau の波長の範囲が書かれていることがある。色の波長の範囲については、調査したひと自身が自分の母語の色彩語を分析しているつもりかどうか分からないが、blau と「青」の結果を見てみると、これは紛れもなくドイツ語の blau や日本語の「青」を定義している結果になっている。

blau	(a) 440 — 485nm	(b) 440 — 485nm	(c) 440 — 485nm	(d) 440 — 490nm
青	(e) 450 — 455nm	(f) 450 — 500nm	(g) 455 — 485nm	(h) 467 — 483nm

(a) Meyers Enzyklopädisches Lexikon. 1971–1981 (b) Der Neue Brockhaus. 1973–1975
(c) Ullstein Lexikon der deutschen Sprache. 1969 (d) Bertelsmann Discovery 1995, CD-ROM
(e) 『世界大百科事典』 CD-ROM 版第 2 版, 日立デジタル平凡社, 1998
(f) 塚田:『色彩の美学』 (g) 川上・小松:『新版色の常識』 (h) 『日本大百科全書』 CD-ROM 版, 小学館, 1998

(a) から (d) までの下限の数値を見ると、4 つの調査結果すべてで 440nm から始まっている。「青」の下限は、四つの調査結果のもっとも低いものでも 450nm だから、波長が 440nm あたりの色はドイツ語では blau となるけれど、日本語では「青」にならないことになる。440nm というのは PCCS (日本色彩研究所配色体系) の色名と標準波長の定義にしたがうと桔梗色が 462nm で、堇色が 452nm

であるから、それよりもさらに紫らしい色なのである。ということは、上記の各文献やPCCSの数値がすべて信頼できるものだとして、日本色名の「桔梗色」や「堇色」はドイツ語では間違いなく blau に含まれるということを意味している。また、日本の「青」についての結果では、(e), (f), (g) の数値をもとに判断するなら桔梗色は文句なく「青」に含められることに注目したい。「堇色」でさえ、(e) と (f) の数値に基づけば「青」ということになる。なお、「青」や blau の波長の範囲で上限の数値は青から緑色の色相と関係があるが、とくに日本語のデータが不揃いで、わたしには解釈できそうにない。

Ⅲ 最後 に

「青」と blau を比較し、とくに紫色の色相とのかかわりで、ドイツ語には紫色の色相をあらわす基本的な色彩語が存在しないことを示唆した。実は、青にしても紫色にしても、人類言語の色彩語の発展段階などを追求した Berlin と Kay (1969) の 11 の Basic Color Terms に含まれていて、人類の言語は、文明の発達段階に応じて白と黒のような 2 語の段階から始まって、一定段階の文化や技術を持つようになると、青や紫色を含め最大 11 語まで発達するものと想定されている。日本語は 20 の調査言語の一つで 11 の Basic Color Terms をもつとされたが、ドイツ語は 20 の調査言語には入っていない。Lehmann (1998:254) は厳密に Berlin と Kay の考え方を適用するならドイツ語は 8 つの Basic Color Terms になるとしている。また、Weisgerber (1963:179) は、現代ドイツ語の色彩世界は 8 つの色彩語で十分なのだと述べている (Im Grunde kann das heutige Deutsch mit den acht Wörtern rot, gelb, grün, blau, braun, weiß, schwarz die ganze Farbwelt bewältigen.)。日本語の Basic Color Terms が本当に 11 もあるのかという疑問もあるし、そもそも人類に共通する 11 の Basic Color Terms という想定自体に対しても疑問は残る。この辺りは今後の色彩語の研究の発展に期待したい。

参考文献

- 上村六郎 (1965) : 『日本の色彩』 河原書店
川上元郎他編集 (1987) : 『色彩の事典』 朝倉書店
川上元郎／小松原仁 (1999) : 『新版 色の常識』 第 2 版, 日本規格協会
佐竹昭広 (1955) : 「古代日本語における色名の性格」『国語国文』 二四一六
城岡啓二 (2000) : 「紫色は青色か?—日本語とドイツ語の「紫」の色彩語について—」『人文

論集』50号の2, 静岡大学人文学部

塚田 敢 (1966): 『色彩の美学』 紀伊國屋書店

パストゥロー, ミッシェル (1995): 『ヨーロッパの色彩』 パピルス

Berlin, Brent / Paul Kay (1969): Basic Color Terms. University of California Press.

König, Jenny (1927): Die Bezeichnung der Farben. Archiv für die gesamte Psychologie, 60, 9-204

Kornerup, A. / J. H. Wanscher (1963): Taschenlexikon der Farben. Zürich: Musterschmidt.

Lehmann, Beat (1998): ROT ist nicht » rot << ist nicht [rot]. Tübingen: Gunter Narr.

Weisgerber, Leo (1963): Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen. Düsseldorf: Schwan.

注)

- ¹ 本稿は, 2001年独文学会春季発表会で行った一般発表「『青』とblauと日独の色彩語の違いについて」の一部の内容を発展させたものである。
- ² 利用したのは, パソコンで使える日本語とドイツ語の辞書以外では, CD-ROM版の『新潮文庫の100冊』, Die Zeit 95 + 96, taz 1986-1997, Deutsche Literatur von Lessing bis Kafka (Directmedia) など。
- ³ 上村 (1965:83 - 96) によると, これは本居宣長の説で, ソニドリがソミドリになり, ソの省略がミドリになったと考えるのだという。また, 本居宣長は, 古事記の「そにどりのあをきみけし」についても, 青い着物ではなく, ソニドリのような緑色の着物と解釈しているのだという。
- ⁴ カワセミは色彩語とかかわりの深い鳥で, ドイツ語のEisblauという色名は, KornerupとWanscher (1963) によれば, カワセミ (Eisvogel) に由来し, また, Eisvogelという名前は鉄のEisenと関連があるのだという。
- ⁵ 「緑色」(『新明解国語辞典』第五版 三省堂), 「青緑色・緑色」(『ハイブリッド新辞林』三省堂), 「青みがかった緑色のかび」(『岩波国語辞典』第五版)。
- ⁶ Der Käsekompass (GU, 1999) にはアオカビの入ったチーズについて mit kräftigen **grünblauen** Adern (Roquefort), mit **grünblauen** Edelpilzadern (Bergader Edelpilz), mit **bläulichen** Schimmellöchern (Bresse Bleu), gelblich mit **bläulichem** Schimmel (Pouligny Saint-Pierre) のようにあるから, どちらかと言えばblauと考えているようである。また, 英語では a kind cheese with **blue** lines and a strong taste (Longman Dictionary of Contemporary English. 1995³) のように, 記述にもblueが入っている。

- ⁷ 学名を *Laccaria amethystea* としている文献も日独ともにあった。
- ⁸ 最近の傾向かもしれないが、ドイツ語名を *Violetter Lacktrichterling* とする図鑑などもある (*Der Große Kosmos-Naturführer Pilze*. 1982, *Pareys Buch der Pilze*. 1988, *BLV Handbuch Pilze*. 1996, *Lavensburger Naturführer Pilze*. 1999)。なお、*BLV Handbuch Pilze* には、このキノコの仲間が *Bläulinge* と呼ばれるのはこのキノコのためだと書いてある。つまり、紫色のキノコに基づいてこのキノコの仲間までも青いキノコと呼ばれているのだというわけである。
- ⁹ 日本にも数十種類のスマレがあるわけであるが、日本の図鑑その他でスマレに青い花のスマレを認める記述は今のところ発見していない。
- ¹⁰ 赤紫というのは色彩語の間違った使い方だと思われる。
- ¹¹ 明治以前の日本のブドウは、甲州という欧州種のブドウもあるにはあったらしいが、ほとんど山葡萄のことである。
- ¹² 日本人作家でもブドウを青に分類するひとがいる。「二人はブドウ売場の前に立って、バカみたいに青いブドウがいいか、緑色のブドウがいいか迷っていた」(曾野綾子:『太郎物語』)。緑色のブドウと選択を迷っているのだから、この青いブドウは緑色のブドウではありえない。また、ブドウの色の詳細は不明だが、遠藤周作のフランスを舞台にした小説に『青い小さな葡萄』がある。
- ¹³ 英語では *green or dark purple in colour* (*Collins Cobuild English Language Dictionary*. 1987)。仏語ではドイツで *Blauer Spätburgunder*, *Blauer Burgunder*, *Blauburgunder* と呼ばれる品種が *Pinot Noir* となるように「黒」と表現するようだ。この品種の色はドイツでは *Beeren rund bis oval, dunkelblau, [...]* (*Farbatlas Rebsorten*. Ulmer, 1998) とやはり *dunkelblau* である。なお、フランス人のパストゥロー (1995:203) は、「私たちは (...) 紫色の葡萄を《黒》ぶどう、緑または黄色のぶどうを《白》ぶどうといっている」と述べている。
- ¹⁴ ドイツ語には *rauchblau* と *rauchgrau* という色彩語がある。*Kornerup / Wanscher* (1963:193) では、煙の後ろが明るいときに *grau* や *braun* に見えるのだと説明している。
- ¹⁵ 連想テストでも「紫」とタバコの煙を結びつける傾向が出ている (『色彩の事典』1987, 261, 赤, 黄, 緑, 青, 紫, 白, 黒の7つの色彩からの自由連想)。
- ¹⁶ *Kaeding* が集めた1900年頃の1100万語の資料を再分析した *Helmut Meier* の *Deutsche Sprachstatistik* (Hildesheim, 1964) の頻度表に *violett* は26回

となっているが、lila は記載なし。König (1927) の調査では、lila と violett について 296 人中 159 人が lila しか使わないと答え、violett しか使わないと答えたひとが 36 人、区別して使うと答えたひとが 79 人、区別せずに使うと答えたひとが 16 人という結果になっている。とくに社会階層の高くない層ではもっぱら lila が使われていることも明らかにしている。最近では lila の使用が多くなっていることは Duden Mein erstes Wörterbuch (1991) と Pons Junior Illustriertes Wörterbuch (1994) の記述からも伺える。どちらも色の説明として 11 色のもっとも基本的な色彩語をあげているが、violett ではなく、lila になっている。後者は 1900 語の辞書の部をもつが、violett は見出し語にも採られていない。

- ¹⁷ ドイツ各地から集められた 6 歳から 10 歳までの子供の書き言葉と話し言葉のコーパス (Braunschweiger Textkorpus zur mündlichen und schriftlichen Redesprache, 1966 年から 1969 年にかけて集められたデータ) があるが、violett はもう出てきていない。lila は出てきているが頻度は非常に低い。blau が 658 回に対して lila は 10 回に過ぎず、beige の 9 回とほとんど変わらない。
- ¹⁸ 日本語でも「黄赤」や「赤黄色い」が使われることがある。黄赤は『新潮文庫の 100 冊』には用例がないが、岩波国語辞典では「黄赤」や「黄赤色」が合計 13 回使われている。たとえば、あんずやびわの実には黄赤色になっているし、柿の実も黄赤とされている。一種の学術用語なのかもしれない。「赤黄色い」は「頗る大きな赤黄色い星」(中島敦：『李陵』) がある。